


 巻頭言

## 侵略的外来昆虫に思うこと

 公益財団法人 報農会 **た** **つき** **さだ** **ひろ**  
**田** **付** **貞** **洋**


新型コロナウイルスの猛威が全国に及んでついに「国難」といわれ、グローバルな拡大はパンデミックの様相すら呈する深刻な状況のなかでこの原稿を書いている。ワクチンはもちろん有効な治療薬もいまだないうえに、無症状の感染者からも人に移ることやいったん陰性になった人が再び陽性に転ずる等、類まれな感染力が不気味である。今は感染機会を減らすことが唯一有効な対策のようだ。確かな情報の共有に基づく国民全体の努力により難局を切り抜けて、拙文が世に出るころには終息していることを切に祈る。

ウイルス拡散に立ち向かう様々な動きは、スケール、重大性、対象の違いはあるが、侵略的外来昆虫の対策にも通じるところがある。どちらも人によって持ち込まれる新奇な厄災であることや、早期発見・早期対策が重要で一度拡散してしまうと対策が困難かつ高コストになること等類似点があるからだ。そんなことから、私自身がかわって来た、アルゼンチンアリとクビアカツヤカミキリに、この2、3年メディアを賑わせているヒアリを加えた3種の特定外来生物を例に対策の現状と今後をまとめてみた。

### 侵略的外来アリーアルゼンチンアリとヒアリ

アルゼンチンアリの原産地南米から世界各地への侵入の歴史は古く、1世紀半を超える。日本では四半世紀前に広島県で発見されたとき、すでに市街地に生息地が広がっていたので、早期発見ができなかったケースになる。侵入地で異常増殖し、生態系かく乱、農業被害、建物への侵入等多様な被害をもたらす。現在では西日本から関東の広範囲に生息地が知られ、市街地に多発域が広がっている場合は根絶が難しい。本種は侵略的外来アリの中でも格段に増殖力が大きく、しかも貨物などに便乗して他所へ運ばれる機会が多い。上述のように多発してから気づくことが多いのはヒアリと異なり毒針をもたないことが一因かもしれない。有効な対策はスーパーコロニーが広がる地域全体を対象にしたベイト剤による一斉防除で、これを辛抱強く繰り返すことで生息密度の低下、生息範囲の縮小も可能だが、それには自治体のリードと住民の理解と協力が必須だろう。

いっぽう、同じ南米原産のヒアリはかねてから侵入が警戒されていたが、じっさいに侵入が確認されたのは3年前の兵庫県だった。その後各地の港湾などで次々と見

つかって「殺人アリ上陸」と大騒ぎになったが、早期発見・早期対策が可能な段階にある。コンテナなどで侵入が確認されるたびに適切な処置がなされて定着・拡散は防がれてきたが、昨年9月になり東京港青海埠頭で多数の女王と巣が見つかり、定着の恐れが一気に高まった。今冬もベイト剤による防除が継続されているとのことで、まもなく実施される生息調査の結果が注目される。本種には毒針を使った集団攻撃があり、致死率は低いもののアナフィラキシーショックにより死に至ることもあるので警戒感が特に強い。本種の拡散はアルゼンチンアリほどスピーディーではなく、米国以外への侵入は今世紀に入ってからである。ただし日本への侵入の機会はこの数年明らかに増加しており、侵入・定着への嚴重警戒が今後いっそう重要になる。つい先日、環境省の専門家会議で決まったというヒアリ探知犬の育成にも期待がかかる。

### クビアカツヤカミキリ

花見のおもな対象であるソメイヨシノが枯死する甚大な被害で急速に知れ渡った中国原産とされる外来種で、関東北部、中部、近畿、四国で生息範囲が拡大しつつある。サクラ類以外にウメ、モモ、アンズ等バラ科果樹の被害も広がり、農業害虫としても重要になっている。加害ステージの幼虫は樹幹や枝に潜孔するため防除手段が限られるが、成虫も含めた総合的な防除体系構築を目指す森林総研主導のプロジェクトに各地の試験研究機関、大学、民間企業が参加して活動が鋭意進行中である。すでに有望な成果がいくつも得られていて今後の進展が期待される。

### おわりに

侵略的外来種が存在する原因は導入した人間にある。われわれはまずその責任を自認し謙虚でありたい。対策の基本は相手をよく知ること。種の正確な同定と生態の把握（できれば原産地のも）は不可欠だ。そのうえで正しい情報を関係者はもとより、一般に広く開示して関心を持ってもらうことが重要だ。それにより協力関係のネットワークが構築できれば、早期発見・早期対策に始まる防除対策が有効に機能するだろう。上に挙げたクビアカツヤカミキリのプロジェクトはこの意味でもうまく進められている事例だと思う。